

水槽の中の脳 brain in a vat

言語論的転回 linguistic turn

機械の中の幽霊 ghost in the machine

通俗心理学、民間心理学 folk psychology

指示する refer

内部決着主義と外部参照主義 internalism and externalism

認識論 epistemology

認識論 Erkenntnistheorie

水槽の中の脳(brain in a vat) 岩波思想哲学事典(柴田正良)

この項目は現代哲学のキーワードとして優れた教育的な意味を持っているが、ここで私は岩波思想哲学事典(柴田正良)、ブラックウエル西洋哲学事典、ブラックバーン三版の三つの事典項目を比較するが、柴田正良の執筆した項目が圧倒的に優れている。

「指示はいかにして可能か、ということ議論するためにパトナムが用いたSF的仮説であるが、その目的は、形而上学的实在論の立場ではこの仮説を拒否するのが著しく困難であり、しかもこの仮説の下では实在への指示が不可能となるということを示すことによって、形而上学的实在論に対する論駁の一つを提出することであった。もっともこのSF的発想自体はパトナムの独創というより(ノージックによる懐疑論の例示のように)様々な含みをもった哲学的イマジネーションの複合と考えた方がよい。

われわれの経験において外界からの入力(知覚)の最終状態と外界への出力(行為)の初発状態は脳状態に他ならないと考えるなら、その正常な入出力が保証される限り脳だけが存在すれば正常な経験の生起に十分だと言ってよいだろう。あなたがそのような脳だけの存在であり、その脳が保存液の満たされた水槽に浮かび、脳につながれた外部のスーパー・コンピュータがその入出力を制御しているとしよう。その制御が完璧であれば、あなたは脳だけの存在であるにもかかわらず、自分には身体があり周囲には緑の大地が広がり…と思うだろう。あなた方はみな実はそうした脳なのだ、というのがこの仮説である。さてこのとき、こうした脳は外界の事物(水槽やコンピュータ)を指示し、それに基づいて「私は水槽の中の脳だ」と考えることができるだろうか。

自らのこの問いに対するパトナムの答えはノーである。表象と事物との唯一の指示関係をそれだけで決定する神秘的な力が心の側(\*志向性)か实在の側(自己同定的対象)にある、という維持しがたい、<指示の魔術説>をとらない限り、そうした脳はいかなる实在の事物も指示することができない。それゆえパトナムによれば「私は水槽の中の脳だ」は自己反駁的な言明となる。」

もともなった論文はパトナム「理性、真理、歴史」(野本和幸他訳、法政大学出版局1994)であるが、一見わかりやすいが、よく読むと筆者が何を言いたいのか分からなくなる。元型は、ブラックバーンが指摘するようにデカルトの「悪しき霊」(私の心を操作して必ず誤りを真だと信じ込ませる悪霊がいたと仮定しても、我思う故に我ありは正しい)とか、柴田が指摘するようにノジックとかであるが、私は夫の目玉と脳を水槽に吊るして、その前で別の男とセックスして夫に復讐するという映画(たぶんヒッチコック劇場)を見たことがある。この映画がパトナムの論文の影響で作られたのか、パトナムがこの映画からヒントを得たのかは分からない。

以下、二つの英文項目を紹介するが、どちらもパトナムを批判するという意図の方が強く、事典の項目としては失格である。私は、その中に込められたパトナム批判を支持したいので、その点に注目してほしい。

水槽の中の脳 (brains in a vat) ブラックウエル西洋哲学事典 The Blackwell Dictionary of Western Philosophy(2004)

「A thought-experiment imitating Descartes' s argument from dreaming. デカルトの夢論法を模倣した思考実験。

Suppose we remove a person' s brain from his body and keep it alive in a vat, and then wire the vat to a computer that provides the normal stimuli. 我々がある人の脳を彼の身体から外して、水槽の中で飼育し、その水槽をコンピュータに電線でつないで、正常な刺激がると想定せよ。

The result would be that this brain in a vat would have a mental life that merges perfectly with its past life so that it is not aware of what has happened. 結果として、この脳は心的な生活をもつだろう、その過去の生活と完全に合流するだろう。何が起こったかは全く気付かれない。

There is no basis for the brain to distinguish between its present situation and its previous situation. この脳が現在と過去の状態を区別する根拠が何もない。

The conceptual possibility of this experiment leads to skepticism about the reliability of experience and empirical knowledge in our actual lives. この思考実験の概念的な可能性として、経験と現実生活における経験的知識への信頼に対する懐疑に行き着く。

Some philosophers, however, challenge the value of such "science fiction" examples in philosophy. しかし、哲学ではこのようなSF事例には価値がないという哲学者もいる。」

SF 的仮定の内容は、どこまで現実と一致するのか見極められない。結局は、その仮定を言い出した人の解釈が正しいとみなすよりほかにない。フェアな討論ができない。その仮定がない場合にどのような命題が真であると言われているのか明示されてない。結局は、仮定を分析すると帰結が導かれるのならば、トートロジーの真理になる。仮定抜きで、何を証明

したいかを述べるべきである。

次に示すブラックバーンの記述の方がパトナムに対して親切であるが、それでもパトナムの真意をゆがめている。

水槽の中の脳 (brain in a vat) ブラックバーン三版

「An updated version, due to \*Putnam, of "Descartes's thought experiment with the malin genie. デカルトの「悪しき霊」という思考実験のパトナムによる更新版。

We are invited to consider the sceptical possibility that our experience is actually produced by a brain suspended in a life-preserving medium (a vat) and stimulated electrically in such a way as to give us the delusive experience is of living the life with which we are familiar. 次のような懐疑的な可能性を考えてみよう。われわれの経験は実際には培養液 (培養槽) に吊るされた脳によって作られている。電氣的に親しんできた生活を送るといふ偽りの経験を与えるように刺激されている。

One reaction is to deny that this is even a bare logical possibility; 一つの反応はこれは単に論理的な可能性に過ぎないということすら否定するということである。

another is to argue it that even if it is a bare logical possibility, we know that it is not the way things are. もう一つの反応は、それが論理的な可能性にすぎないとしても、現実がそうではないということとわれわれは知っていることと論ずるのである。

A controversial argument of Putnam's attempts to show that the hypothesis that

I am a brain in a vat self-destructs, 私は水槽の中の脳だという仮定が、自滅的であることを示すのが、パトナムの意図だという逆の議論もある。

since if I were one, were I to put it to myself 'I am a brain in a vat', もしも私が水槽の中の脳であるなら <私は水槽の中の脳だ> と自分自身に言って聞かせたとしても、

I would not be referring to brains and vat, 私が脳とか水槽とかの話をしているということはない。and hence would not express appreciation of my true situation. それはだから私の本当の状況の評価を表現するものではない。」

18世紀から19世紀にかけて西洋哲学を動かしたカントの作り出した問題の基本的な構図は、「どうすれば主観は客観を認識できるか」という橋かけ問題だった。20世紀に哲学者たちは、橋かけ問題はもう古い、言語という場面にすべてを置き換えるのだと宣言した。これを「言語(論)的転回」という。野家啓一執筆の項目の一部を引用する。この項目について、ブラックウェルやブラックバーンはひたすら無難な記述を狙ったみたいで、それらよりも、岩波哲学思想事典の野家啓一の執筆項目が優れている。

言語論的転回 (linguistic turn) 岩波思想哲学事典 (野家啓一)

「以上のように、「言語論的転回」とは主として英語圏における分析哲学の興隆を方法論的側面から特徴づけた概念である。しかし、歴史的観点からすれば、これは近代哲学のパラダイムに対する反措定と見ることができる。デカルトのコギトの自覚に始まる近代哲学は、基本的には自己意識の明証性を出発点とし、観念分析や意識分析(反省)を方法として展開された。その結果、意識の私秘性という壁に阻まれて外界存在や他我認識のアポリアを解決できず、不可知論や独我論の袋小路に陥らざるをえなかった。それに対して、哲学の考察場面を私秘的な意識から公共的な言語へと移行し、意識分析から言語分析への方法論的転換を図ることによって、哲学的問題に新たな探究の地平を開こうとしたのが「言語論的転回」であったとすることができる。」

認識論の橋かけ問題が行き詰ったので、言語論的転回で新局面を切り開くというわけだ。このとき「心」というものをデカルトのように実体とみなす味方に疑問が出されていた。本当は「心」は存在しないのではないか。そういう疑問を表したのはギルバート・ライルの「機械の中の幽霊」である。

機械の中の幽霊 (ghost in the machine) 岩波哲学思想事典 (服部裕幸)

「ライルが『心の概念』[1949]において用いた用語。心に関して広く流布している見解によれば、人間の身体は空間の中に存在し他の物質と同様に機械論的な物理法則に従うが、心は空間には存在せず機械論的な物理法則にも従わない。前者は誰もが観察可能であるのに対して、後者は本来的にはその心の持ち主のみが内観によって無謬的に知ることができるとされる。ライルが「デカルトの神話」と呼ぶこの見解にしたがえば、心は身体(機械)に棲む捉えどころのない幽霊の如きものとなる。この説をライルは「機械の中の幽霊のドグマ」と名づけ、それがカテゴリー錯誤と呼ばれる誤りであることを示そうと試みた、しかし生々しい感覚(raw feel)の問題を彼が処理しえているかは疑問である。」この項目の優れている点は、ライルの論点が「カテゴリーミステイク」にあるとする点を指摘していることである。次のブラックウェル西洋哲学事典と比較してみたい。

機械の中の幽霊 (ghost in the machine) ブラックウェル西洋哲学事典 (2004)

「Ryle's phrase to characterize the Cartesian concept of mind. 心のデカルト的な概念を特徴づけるためのライルの用いた言葉。According to Descartes, the human mind and the human body are independent substances that are ordinarily harnessed together. デカルトによれば、人間の心と体は通常はつながれている二つの独立した実体である。Human bodies are in space and subject to mechanical laws. 人間の体は空間の中にあり、機械的な法則に従っている。Their processes and states can be observed externally. それらの過程と状態は、外部から観察することができる。Minds, on the other

hand, are not in space, and are not

subject to mechanical laws. 他方、心は空間内にはなく、機械的な法則には従わない。Their processes and states are private and can be accessed only by their possessors. 心の過程と状態は私的であって、その所有者だけがアクセスできる。After the death of the body the mind

may continue to exist and function. 身体の死後にも心は存在し機能し続けるかもしれない。This dualistic account of human beings is caricatured by Ryle as the dogma of the ghost in the machine. この二元論的な説明がライルによってカリカチュアライズされて機械の中の幽霊というドグマになった。For him the view is mistaken in construing the mind as an extra object situated in a body ライルにとってはこの見方では、心を身体の中に位置する対象と見立てた点が間違っている。and controlling it by a set of unwitnessable activities. また、一組の見えない活動によって制御されているという点が間違っている。Ryle's object in The Concept of Mind is to demolish this dogma. ライルの「心の概念」という著作の目標はこのドグマを粉砕することにある。」

これによって「心」の概念が粉砕されたかといえばそうではない。むしろ、「機械の中の幽霊」は復活している。

通俗心理学 (folk psychology) ブラックウェル西洋哲学事典 (2004)

「Also called common sense psychology, a term for common sense understanding about intentional mental states and overt behavior, using such terms as "belief," "desire," "intention," "fear," "imagination," and "hope." 普通の意味の心理学が通俗心理学と呼ばれる。志向的な心的状態、あきらかな行為について理解するような常識の言葉である。信念、欲望、志向、恐れ、想像、希望などのような言葉で使われている。

In contrast to scientific or experimental psychology, or academic psychology in general, folk

psychology is governed by a putative network of principles, which is taken to underlie our ability to explain and predict human behavior. 科学的、実験的心理学、アカデミックな心理学一般との対比で通俗心理学は、原理の推定的なネットワークによって支配されている。そういう原理が人間の行為を説明したり記述したりする能力のもとになっているものと解されている。

It is familiar since childhood and is used effortlessly by all of us everyday life. それは幼児期からなじんでいるものであり、日常誰によっても特別の努力なしに使われている。

It is folk psychology in the way that our common sense talk about material objects is called folk physics. 常識的にわれわれが物質的な対象について通俗物理学を語っているのと同様に通俗心理学も語られる。

Eliminativism in the philosophy of mind, presented in the 1980s by P. M. Churchland, claimed that folk psychology, an outdated pre-scientific view of the world, should be replaced by a more scientific theory of the mind-brain. 心の哲学のなかの消去主義、たとえばチャーチランドの1980年論文が表しているような、消去主義は、通俗心理学を、時代遅れの前科学的な見方で、もっと科学的な心-脳理論で置き換えられるべきものと主張する。

These claims provoked a continuing debate about the status and adequacy of folk psychology. このような消去主義的な主張が、通俗心理学に対する継続的な論争を喚起している。

In opposition to eliminativism, Fodor and Dennett argue that folk psychology can be vindicated, to greater or lesser extent, by scientific psychology; 消去主義とは反対に、フォードとデネットは通俗心理学が科学的な心理学によって、程度はさまざまだとしても、正統化されると主張している。others argue that folk psychology is not a theory, 通俗心理学は理論ではないという主張もある。for it does not have generalizations about the relations among mental states and about the relations between mental states and behavior. というのは通俗心理学は心理状態とか心的状態と行為の間関係とかについて、普遍化をするわけではないからである。

Some philosophers argue about the claim that the central concepts of folk psychology, such as belief and desire, have features, such as intentionality, which exclude them from any scientific psychology. 哲学者の中には、信念とか欲望とかの通俗心理学の中心的な概念は、志向性と同じような様相を持っており、その点で科学的な心理学には含まれないと論じている。

Folk psychology in another sense flourished in Germany and was represented by the work of Wilhelm Wundt. ドイツで盛んになった民族心理学は全く別の意味である。それはヴィルヘルム・ヴントの仕事によって代表される。Here the term means cultural psychology, that is, a study of the mentality of a people who share a social practice as that mentality is expressed in culture, myths, and customs. ここでは民族心理学とは、文化的な心理学のことであり、社会的な実践を共有する人々の心性の研究である。心性が文化、神話、習慣に表現されるというような研究である。」

要するに、普通に人々が心について語っていることを、そういう事実として受けとめようという姿勢が、英米の哲学者の間に生まれて、その時の受け入れ態勢の対象となるものの名が、「通俗心理学」なのである。

通俗心理学、民間心理学 (folk psychology) 有斐閣現代哲学キーワード (2016)

「我々はふつう自分や他人の行動を信念や欲求などの心的状態によって説明する。このような日常的な行動の説明を支える心についての常識的な知識の体系は民間心理学と呼ばれ

る。民間心理学は心に関するどのような種類の知識なのだろうか。この点については、まず、理論説とシミュレーション説の対立がある。理論説によれば、民間心理学は心に関する経験的な理論である。我々は、たとえば幸せな人を見るとねたましくなるといったような心理法則を経験的に知っており、このような経験的な知識の集まりが民間心理学だというわけである。そうだとすれば、民間心理学による行動の説明は、力学による物体の運動の説明と同じく、法則に基づく理論的な説明だということになる。

これに対して、シミュレーション説では、民間心理学は心に関するシミュレーション能力の集積にほかならない。我々は他人が何を思い、どう行動するかを自分がかりにその他人の状況にあったとすれば、何を思い、どう行動するかを考えてみることによって知ることができる。心に関する日常的な知識とは自分を他人の状況に置いて考えてみる能力、つまり他人をシミュレートする能力にほかならないのである。」

言語理論に土俵を移せば、心の内外の橋渡しという問題には関わらなくて済むという姿勢が「言語学転回」と言われた英米哲学の基調だった。ところが通俗心理学という形で、伝統的な意味の心を主題にとりいれざるを得なくなった。つまり言論的展開がくたびれて、認識論的な枠組みという布団に寝そべるようになった。それを表しているのが「内と外」、「内在主義と外在主義」という問題である。「水槽の中の脳」というモデルは、内と外という関係に哲学の主題を引き戻す役割をはたしている。

「水槽の中の脳」に対する柴田正良の説明をもう一度引用する。ただし単語のいくつかを「主観」と「客観」という言葉に置き換える。「指示」を「認識」に置き換える。

「主観が水槽に浮かび、主観につながれた外部のスーパー・コンピュータがその入出力を制御している。その制御が完全であれば、主観が、自分には身体があり…と認識するだろう。こうした主観は客観を認識し、それに基づいて「私は水槽の中の脳だ」と考えることができるか。パトナムの答えはノーである。主観と客観との唯一の認識関係をそれだけで決定する神秘的な力が主観か客観にある、という維持しがたい、＜認識の魔術説＞をとらない限り、そうした主観はいかなる客観も認識することができない。」パトナムは18世紀、19世紀の哲学者が、認識について悩んだのと同じ構造が、指示について成り立っていることを告げている。

ここで指示について、英語と日本語の語感の違いという厄介な問題がある。英語で「指示する」(refer)は、話し手の心が対象物を指示するという含意で使われる言葉である。この言葉についてのユニークな説明があるので紹介したい。ペリー(下田に来たペリー提督の孫、顔も似ている)などの編纂した「哲学入門」(J. Perry, M. Bratman, J. M. Fischer: Introduction to Philosophy, Oxford 2016)の付録(Glossary)にある。

refers (ペリー等哲学入門付録2016)

Philosophers use a number of terms for the relationship that holds between singular terms and the objects they designate or stand for. 哲学者たちはいくつかの術語を、

単独の術語とそれらが識別し、代表となる対象との関係のために用いる。

Refers is used both for the relation between singular terms and what they stand for, and for the act of using a singular term to stand for something (“ ‘That piece of furniture’ refers to the chair” vs. “Jane used ‘that piece of furniture’ to refer to the chair.”) 「指示する refer」には、二つの使い方がある。ひとつは、単独の術語とそれらが代表するものとの関係に。もうひとつは、単独の術語を何かを代表するために用いる行為に。あの家具が椅子を表している。ジェインはあの家具を椅子を表すために用いた。

The thing referred to is often called the referent. 指示されたものはしばしば指示物と呼ばれる。

Denotes is most properly used for the relation between a definite description and the object that uniquely meets the descriptive part, 「denote」は、確定記述と対象（記述部分と唯一的に対応する対象）の関係に用いられるのがもっとも適切である。as in “ ‘The author of Waverley’ denotes Sir Walter Scott.” たとえば「ウェヴァリの著者といえばウォルター・スコット卿のことだ」という用例のように。

But denotes is often simply used as a synonym of refers. しかし denote は refer の同意語として用いられることも多い。

The thing denoted is sometimes called the denotation and, less often, the denotatum. Denote されたものが denotation と呼ばれることもあるが、denotatum という言葉はあまり使われない。

Names is used for the relation between a name and its bearer (or nominatum), as in “ ‘Fred’ names that man.” 「フレッドという名はあの男を指す」という用例では、名前 name が名前とその持ち主の関係に用いられる。

are used in a very general way, as the latter has been in this discussion. この議論に登場した言葉としては、「Designate」と「stands for」とは使われる幅がとても広い。」

哲学の本を読んだことのない人のために良く配慮された説明だと思う。「ウェヴァリの著者といえばウォルター・スコット卿のことだ」というのは、バートランド・ラッセルの用いた例である。言葉（表現）と物（表現の対応物）と人（表現者）に関して、A frown denotes displeasure 「しかめ面は不満のしるし」は「彼はしかめ面をして不満を表している」、「彼の不満がしかめ面に表われる」言い換えられる。I am not referring to you. 「私はあなたのことを言っているんじゃない」という場合には、指示は私の表現する気持ちに深くかかわっている。しかし、その私の気持ちを隠すために「安物買いの銭失い」ということで、「そのことわざがあなたに該当する」（言葉が対象を指示する）ことを表現することができる。The novel stands for life itself. 「この小説は人生そのものを表している」を、作者を主語に言い換えることはできる。

Cities are designated by red dots. 「都市は赤点で表示される」 Red dots designates



cities. 「赤点は都市を表す」の場合、地図製作者の意図は重視されないから、それを主語とすることはあまりない。ゴッホは麦畑のカラスで自分の死を表す。麦畑のカラスはゴッホの死を表す。ゴッホの死は麦畑のカラスに表われる。——このように言葉（表現）と物（表現の対応物）と人（表現者）に関して、どれを主語としても、同じ動詞（日本語なら「あらかわす」「あらかわれる」）で表現される場合がある。動詞の意味が、対応する、象徴する、具象化するなどを含むことになる。「曼荼羅は

表現とは、内を外に運ぶ、移動させる、投影するなどの意味形態をもつ。refer は「元へ」「運ぶ」という語源から来ている。実在するものの故郷が、アイデアの世界にあって、当面は物の名前となっている。物に名前を対応させることは、物を故郷のアイデア界の名前の前に運ぶことである。

岩波哲学思想事典で「内」「外」を引くと、飯田隆「内在的問い、外在的問い」、野家啓一「内的関係、外的関係」という似たような項目が二つ掲げられていて、紛らわしい。飯田隆「内在的問い、外在的問い」の方が、表現に関与している。飯田隆「内在的問い、外在的問い」の主として後半を引用する。

内在的問い、外在的問い (internal/external question) 岩波哲学・思想事典、飯田隆

「カルナップは、観念論・実在論・唯名論といった形而上学上の対立は擬似問題にすぎないと、一貫して主張してきた。カルナップは、存在もしくは実在に関する問いに2種を区別すべきだと言う。「内在的問い」と呼ばれる第1の種類問いは、ある一定の理論的・言語的枠組みのもとでの存在に関する問いである。こうした問いは、経験的もしくは論理的な探究によって答えが与えられうる。たとえば、「ホメロスは実在したのか」は歴史学のなかで、「百万よりも大きな素数は存在するか」は数学のなかで、それぞれ答えが与えられうる、それに対して、「外在的問い」と呼ばれる、第2の種類問いは、理論的・言語的枠組みそのものにかかわる問いである。ここでは、数を存在者に数え入れるような枠組みを採用すべきかどうかといった事柄が問題である。カルナップによれば、ここで働く考慮は、理論的なものではなく、そうした枠組みを採用することが便利であるか有益であるかといった、純粋にプラグマティックな種類のものにすぎない。」

ある検証可能な領域の内側でたてられる問題と、そういう領域を度外視した問題の違いをカルナップは述べているようだ。内とか外とかをどのように設定するかという枠組みが、何を意味するかを考えると、主観の内外、概念の内外、経験世界の内外などの枠組みはプラグマティックな種類のものにすぎないという見方が、興味深い。

ここで気になるのは「内在」という言葉である。「内在」は immanent (内にこもる) の訳語として使われてきたのに、最近では internal (内で決着) の訳語としても使われるようになってきている。「内部決着主義」と訳しておく。

内部決着主義 (internalism) ブラックウェル西洋哲学事典 (2004)

「A theory of epistemic justification, 認識論的な正当化の理論で、which claims that the justification of one's belief is determined by one's actual or potential awareness of the correct cognitive process that generates and sustains the given belief. ある人の信念の正当化は、その人が実際に、もしくは潜在的にもつ、今現に持っている信念を生み出し、維持している、正しい認識過程に気づいているによって決定されると主張するもの。

Accordingly, justification is a function of one's internal states:この立場によれば、正当化はある人の内部的な状態の機能である。one's perceptual states, memory states, and so on. その人の知覚状態記憶、などなど。

This has been a major trend since Descartes, これがデカルト以来の主となる傾向であった。

who identifies justification with having a reason for thinking that the belief is true. 彼は正当化を、その信念が正しいと考えるための理由をもつことと同一視した。

According to this theory, the justification of a belief is determined entirely by subjective characteristics, ignoring external factors, and is therefore opposed to externalism. この理論によれば、信念の正当化はまったくただ主観的な特性だけで決定され、外的な因子は無視される。そこで外部参照主義と対立する。

In the philosophy of language, internalism refers to the position that denies that to understand a sentence is to understand its truth conditions, holding instead that the meaning of a sentence is its use. 言語哲学では内部決着主義とは文を理解するということは、文の真理条件を理解することであるということを否定する立場のことである。これに対して文の意味はその使用であるという立場がある。」

この記述に登場するデカルト云々は、間違いだらけである。デカルトの立場は、たしかに一種の内部決着主義を含んではいるが、それは明晰判明知の原則という形をとっている。デカルトが、明晰判明知を厳格に定義していないという問題点はあるが、デカルトの立場はこの記述にのべられているような素朴な主観主義ではない。

外部参照主義 (externalism) ブラックウェル西洋哲学事典 (2004)

「A theory of epistemic justification, which is opposed to internalism. 認識論的正当化の理論で、内部決着主義に対立する立場。It denies that the justification of a belief requires the believer to be aware of the cognitive process of the given belief. この立場は、信念の正当化は信念を抱く人が、その所与の信念の認識過程に気づいている必要があるということを否認する。Internalism, which holds that one must have this awareness, 内部決着主義は人はそのような気づきを持つべきであることを支持する。has difficulty in explaining the ascription of knowledge to unsophisticated adults or to young children, and in explaining some classical problems, such as induction.

この立場は、知識的に素朴な成人や若い子供たちにも知識があることを説明するのに困難がある。また帰納の問題のような古典的な問題を説明するのににも困難がある。Externalism suggests instead that the nature of a belief is at least partly determined by the surrounding objective world, rather than solely subjectively. 外部参照主義は、信念の本性はもっぱら主観的に決定されるというよりは、少なくとも部分的には取り巻く客観的世界によって決定されることを示唆する。Therefore, justification requires the consideration of factors external to one's consciousness. それゆえ正当化には人の意識の外部の因子への考慮が必要である。Externalism thus links justification to truth. 外部参照主義は真理への正当化と結びつく。There are various forms of externalism, 外部参照主義にはさまざまな形がある。and the most influential include reliabilism, もっとも影響の大きいものに信頼性主義がある。which claims that justification depends on the reliability of the cognitive process generating the belief, 信頼性主義は、正当化は信念を生み出した認識過程への信頼性に依存すると主張する。and probabilism, which claims that justification should be evaluated in terms of probability. 蓋然主義は、正当化は蓋然性(確率)によって評価されるべきだと主張する。In the philosophy of language, externalism claims that to understand a sentence S descriptively is to know under what conditions S is true. 言語哲学では、外部参照主義は、Sという文章を記述的に理解するという事は、<Sは真理である>がなりたつ条件を知ることであると主張する。」

内在説 (internalism) イギリス哲学思想事典 (中才敏郎)

「内在説には、「基礎づけ説」(foundationalism)と「整合説」(coherentism)がある。信念の正当化はすべて別の信念からの推論によるとすれば、正当化はつねに条件付きである。つまり、Aが正当であるのは、Bが正当である場合であり、Bが正当であるのは、Cが正当である場合である、……など。このような無限遡行を避けるには、推論を含まない正当化がなければならない。つまり、他の信念によって正当化される必要のない正当な信念(基本的信念)がなければならない。これが基礎づけ説の主張である。たとえば、A. J. エアは『経験的知識の基礎』で、現象主義的な基礎づけ説を展開した。他方、整合説は、信念Bが正当であるのは、それをメンバーとする信念の組の整合性にそれが寄与する限りにおいてである、と主張する。たとえば、W. セラーズは正当化に関して全体論的な整合説を採った。ここで整合性とはたんに無矛盾性だけではない。整合性があるとは、信念の間に矛盾がないだけでなく、それらが相互説明的(mutually explanatory)でもあることである。もしAをBが正当化し、BをCが正当化し、CをAが正当化するというように、正当化が環状になっても構わない。それらが相互説明的であれば、知識と呼ばれてもよいのである。」

外在説 (externalism) イギリス哲学思想事典 (中才敏郎)

「外在説には因果説 (causal theory) と信頼性説 (reliability theory) とがある。因果説は、知識の第四の条件として「ある事実が、それに対する主体の信念の原因である」という条件を付け加えて、ゲティア反例を排除しようとする。というのは、ゲティア反例のサチコの信念はたまたま真であり、それを真とする事実はサチコの信念の原因ではないと考えられるからである。他方、信頼性説は因果説を補完するものと見られる。真である正当な信念は、もしそれが信頼できる方法によって得られるならば、知識であると考えることができる。知識とは経験的に信頼できる信念であると言ってもよい。しかし、信頼性とは何かについては様々な意見がある。」

知識とは正当化された信念であるというテーゼが、西洋の認識論 epistemology の背景にある。岩波哲学思想事典の「知識」には、「一般に西欧語では知識は真なる知識と理解されており、したがって偽なる知識はありえない」(今井知正) と記載されている。日本語では「知恵」と言えば、いい内容を含んでいて、わざわざ「悪知恵」と言わないと、悪い目的に使われる知恵という意味にならない。普通の日本語では「間違った知識」という言葉は「丸い四角」のように自己矛盾する概念とは受け取られない。

認識論という項目を事典で探すと、英語系 epistemology ではプラトンを出発点としているのに対して、ドイツ系 Erkenntnistheorie ではカントを出発点としていて、日本ではその二つの系統の認識論がまったく接触することなく、輸入されてきている。その結果不毛な食い違いが発生している。二つの認識論を事典項目から取り上げることにする。

認識論 (epistemology) ブラックバーン三版 (2016)

「The theory of knowledge. 知識の理論。Its central questions include the origin of knowledge; その中心的な問題には知識の起源が含まれる。the place of \*experience in generating knowledge, and the place of reason in doing so; 知識を生み出す場面での経験の場所と、行為する場面での理性の場所。the relationship between knowledge and certainty, 知識と確実性との関係 and between knowledge and the impossibility of error; 知識と不可謬性との関係 the possibility of universal scepticism; 全面的懐疑主義の可能性 and the changing forms of knowledge that arise from new conceptualizations of the world. 世界の新しい概念化から生まれる知識の形式の変化。All of these issues link with other central concerns of philosophy, such as the nature of truth and the nature of experience and meaning. これらすべての問題が、真理の本質、経験と意味の本質というような哲学の他の中心問題と連携している。

It is possible to see epistemology as dominated by two rival metaphors. 認識論を二つの対立するメタファーで支配されていると見ることは可能である。

One is that of a building or pyramid, built on foundations. 一つは、基礎の上に立てられた建物とかピラミッドである。In this conception it is the job of the

philosopher to describe especially secure foundations, この概念の中では特に安全な基礎を記述するというのが哲学者の仕事である。and to identify secure modes of construction, so that the resulting edifice can be shown to be sound.そして組み立ての安全なモードを浮かび上がらせる。出来上がった組み立てが大丈夫だということがはっきりするように。This metaphor favours some idea of the 'given' as a basis of knowledge, and of a rationally defensible theory of confirmation and inference as a method of construction. このメタファーと相性がいいのは、知識の基盤としての所与という考え方である。そして組み立ての方法としては、確証と指示の合理的に擁護できる理論という考え方である。

The other metaphor is that of a boat or fuselage, もう一つのメタファーは、船とか飛行機の胴体で、that has no foundations but owes its strength to the stability given by its interlocking parts. 下支えはない。連結する部品によって得られる安定性に強さを得ている。This rejects the idea of a basis in the 'given', 所与に基盤があるという見方は避ける。favours ideas of coherence and "holism, but finds it harder to ward off "scepticism. 整合性とか、<全体主義なのに懐疑主義をかわすのが難しいとわきまえるもの>と相性がいい。

The problem of defining knowledge in terms of true belief plus some favoured relation between the believer and the facts began with "Plato's view in the Theaetetus that knowledge is true belief plus a logos. という問題は、信念を持つ人と事実の間の好都合な関係をプラスした信念という言い方で知識を定義するという問題は、知識はロゴスをともなう真の信念であるというプラトン『テアイテトス』の見方とともに始まった。」

ヘルダーの哲学小事典 (Alois Halder/Max Mueller Philosophisches Woeterbuch, 3. Auflage 1992) は、初版が1958年で改訂を重ねてきた、バランスよく目配りを利かせた小事典である。

認識論 (Erkenntnistheorie) ヘルダーの哲学小事典 (1992)

「Einzeldisziplin der Philosophie, in der zweiten Haelfte des 19. Jh. entstanden (unter zumeist fragwürdiger Berufung, auf Kant). 哲学の一科目。19世紀の後半に、おおくは多少問題が残るもののカントを引き合いに出して成立。Fasst Erkennen als dreigliedrige Relation von Erkennendem (Erkenntnissubjekt), Erkenntnisgegenstand (Objekt) u. Erkenntnisinhalt. 認識を「認識する者」(認識主体)、「認識対象」(客観)、「認識内容」という三項関係としてとらえた。Inauguriert bereits durch Descartes' scharfe Trennung zwischen res cogitans u. res extensa, すでにデカルトによって、思惟と延長との厳格な区

別が導入されていたので、setzt E. eine vorgängige Differenz zwischen dem Erkennenden (Bewußtseinsimmanenz) u. dem zu erkennenden Objekt (Bewußtseinstranszendenz) voraus, um durch Analyse der Sinnes-, Verstandes- u. Vernunftvermögen zu klären, 認識論は、認識者(意識内在)と認識客体(意識超越)との先行する区別を前提して、感覺能力、悟性能力、理性能力の分析を通じて説明する。

wie das Subjekt たとえば主体はin diesen これらにおいてden Schritt zu der von ihm unabhängig gedachten „Außenwelt" leisten (Transzendenzproblem) 主体から独立して いると考えられる外界への歩みを行い、u. sich der Angemessenheit seiner orstellungen an die „äußeren" Gegenstände versichern könne. その表象作用が外的な対象に一致することを確かめることができるうという説明である。

In der Rückführung des Erkenntnisproblems allein auf die Frage der Gewißheit ist es der E. unmöglich, しかし認識問題を確実性の問題にのみ引き戻すと、認識論には、under den von ihr entworfenen Aspekten それ [認識論] から投影された相のもとでは、die vorgängige Verflochtenheit des Ichs in der Welt zu sehen, 自我が世界にあらかじめ巻き込まれていることを見るのが不可能である。die vor aller Zentrierung der Frage auf ein „weltloses" Ich immer schon faktisch ist. この巻き込まれていることは、世界なき自我に問題をどのように集約してもその前につねにすでに事実的であるのだから。So übersieht E., daß ihre Fragestellung zu eng gefaßt ist; sie setzt die Seinsart von Subjekt, Objekt wie auch die der Relation unbefragt voraus; 認識論が、自分の問題設定が狭すぎるということを見落とすならば、認識論は主体、客体の存在の仕方を両者の関係を含めて問わないままに前提している。diese Frage wie auch jene nach Wesen, Zustandekommen, Umfang u. Gültigkeit hatte bereits die klassische Metaphysik wesentlich radikaler gestellt.こうした、本質、成立、範囲、妥当性に関する問いを、すでに古典的形而上学は本質的により根底的に提起していた。

In weiterer Bedeutung wird unter E. jede Reflexion auf Ursprung, Art, Reichweite usw. des Erkennens verstanden.そのほかの意味では、認識論には、認識の発生、仕方、射程への反省も含まれる。」

認識論という哲学領域のイメージが、ギリシャ的な知識論を原型にした英米型とカント主義を原型にしたドイツ型とで、まったく別々の議論をしてきたのだが、現代の英米哲学の18・19世紀ドイツ哲学への傾倒は、そこにまったく新しい視野を広げるものと思われる。(了)